

洋装本を除いた古書(線装本)は全部で八二七点、二三八三冊である。

①、漢籍(中国人著作)中国刊本 三三三点、二二九冊ある。多くは清刊本であるが、なかには明(嘉靖)刊『活人心法』、明刊『居家必備』などの古版もある。清(乾隆)刊の『医宗金鑑』六三冊は官版で、序は朱色刷、しかも曲直瀬家「養安院蔵書」の印がある。康熙刊の『張氏医通』一五冊も比較的めずらしい。

②、漢籍日本刊本(和刻本) 一五六点、六三一冊ある。古活字版はないが、十七世紀から十九世紀までの江戸く明治初との和刻本がよく揃っている。

③、漢籍日本写本 四点、五冊ある。

④、国書日本刊本 これが最も多く、五〇八点、一三七六冊ある。欧米人原著で日本人訳の蘭方書も比較的多く、『解体新書』初版も蔵している。十七世紀く十九世紀までほぼ片寄りが無い。

⑤、国書日本写本 一二三点、一四九冊ある。

⑥、その他 三点、三冊。仏書ほか。

石原保秀文庫はその専門からして養生関係が充実しているものの、古方・後世方、また医経、本草、鍼灸、蘭方、婦人、小児、老人、救急、診断、その他の分野が多く揃っている。漢方家としては有数のコレクションといえるであろう。

(平成十六年十一月例会)

野口英世の初期の事績について

森山 徳長

本稿は野口の少年時代、高山歯科医学院とのかかわりの時代、順天堂医院助手、伝染病研究所技手補、横浜海港検疫医官補、中国での国際防疫団員、東京歯科医学院講師の各時代すなわち渡米前の野口清作―英世の業績に的をしぼって報告するものである。

(一) 少年時代

父佐与助は大酒飲みのみが印象づけられているが手技に秀で勤勉・努力型の人物であり、母シカも忍耐強い働き者であり、野口は両親の強い努力家の素質を持って勉勵し成功を勝ち得たのである。尋常小学校では「手ん棒」と罵声を浴びながらも主席を通し、第一の恩人小林栄先生の公私共々の教導で高等小学校を卒業した。この間渡部鼎ドクトルに第一回の手術を受け、医学の道を志して渡部医院の薬局生となり、医術開業試験に備えた(第二の恩人)。

(二) 血脇守之助の援助(第三の恩人)

明治二九年九月上京し前期試験に合格したが無一文となった野口は、血脇に頼み込んで高山歯科医学院の学僕となり、歯科医学叢談の編集を手伝った。三〇年五月からは血脇の特別な計らいで、濟世学舎に学び十月には後期試験に合格、晴れて医師の資格を得て、学院の病理学講師に任せられ、また順天堂医院に就職。図書編集係の業務を兼務した。

(三) 伝染病研究所

血脇他の推挙を得て伝研技手補に採用されここでも外国語学力を評価され編集係となった。翌年、赤痢菌発見者志賀に逢うためマニラより来京したジョンズ・ホプキンス大のサイモン・フレキシナー教授(第四の恩人)が伝研をたずね、野口はその通訳・案内係を命ぜられた。野口の渡米の具体的意志はこの時確定。

(四) 病理学的細菌学的検査術式の出版

渡部医院薬局生時代から手掛けていたカール・フォン・カールデンの著書を和訳し出版した。彼の単行本中唯一日本語の著書で、渡部鼎共著としたのは彼に対する最大の尊敬の現れであった。東歯大保存書の裏表紙には『野口英世君より贈与せらる』八子弥寿平と墨書してあり、兩人の親交を示す貴重な一本である。

(五) 海港検疫所と牛荘への出自

三二年五月、北里の命により横浜海港検疫所に医官補として赴任し、三月後中国人船員からペスト菌を検出して手腕を評価された。その後中国牛荘(現在の営口)でペストが蔓延し、十月には日露の国際防疫団が現地に派遣されることとなり、野口も北里の配慮でこれに加わり牛荘に向かったが、船底の苦力と話して早速中国語を或程度マスターしてしまった。防疫の仕事は半年弱で終わったが土地の有力者に気に入られた野口は更に留まって仕事を続けた間、高給(二八〇—四二〇円)に恵まれ、渡米資金は充分蓄えた筈であった。義

和団の乱のため七月帰国したが、いつもの浪費癖で血脇家の食客となり奥村鶴吉と起居を共にした。

(六) 東京齒科医学院講師としての野口英世

渡米前五ヶ月が新講師としての在任期間であった。病理学、薬理学の講義と、アメードー著仏文『齒科法医学』を口述し、奥村がまとめて『歯牙形態学』を学院の教科書とした。

課外講義で『齒科法医学』『咬傷の法医学』他がある。

歯科学報五巻に野口の論文が出た時には、彼はペン大学の一隅で水とパンの粗食に甘んじて、蛇毒の文献を必死に涉っていた。

(平成十六年十二月例会)

史的に見る薬学成立の経過と課題——日本薬史学会創立五十周年に当たって

川瀬 清

一、西欧市民社会における薬系(學術)専門職
 西欧の各地を訪れる度に、農村と際立った対照を見ている都市、そこには中央広場があり、そして市庁舎・教会が置かれ、放射状の道路、また、中心を取り巻く環状道路、時に城壁。それから終着駅型の鉄道など、各都市景観の著しい共通性が甚だ印象的である。これらの都市の大部分は十一世紀頃、既に存在し、今日の都市で当時、影も形も無かったものは、十指で数えられる程度という。